

農村に音楽を！
楽農ゼミナール
事業報告

「羅須地人協会」に倣う

宮沢賢治「農民芸術概論綱要」 実践運動のすゝめ

あらし山年輪塾
代表 清水 和繁



宮沢賢治の「農民芸術概論綱要」には、
こう書かれています。

「おれたちはみな農民である。ずいぶん忙しく仕事もつらい。もつと明るく生き生きと生活をする道を見つけない。いまや、われらは新たに正しき道を行き、われらの美を創らねばならぬ。芸術をもてあの灰色の労働を燃せ。すべての悩みをたきぎと燃やし、なべての心を心とせよ。風とゆききし、雲からエネルギーをとれ。ここにはわれら不断の潔く楽しい創造がある。都人よ、来つてわれらに交れ、世界よ、他意なきわれらを容れよ」と。

賢治は農学校の教員を辞した後、私塾「羅須地人協会」を設立し、昼間は周囲の田畑で農作業にいきそし、夜には科学や農業技術などを教え、自らが唱える「農民芸術」の講義を行いました。「農民芸術概論綱要」は、その講義資料として執筆されました。ここでは周囲の人々を集めたレコードの鑑賞会や読書会、さらに自らチェロを弾き農民による楽団の結成も考えていました。当時の新聞には「農村文化の創造に努む 花巻の青年有志が 地人協会を組織し自然生活に立ち返る」

という記事が掲載され、羅須地人協会は「農民芸術学校」ともいふべきもので、賢治流「農村コミュニティ」として機能していたと思います。

お洒落な田舎に
山間の一軒家に人を呼ぶ

賢治の「羅須地人協会」に倣い、
「舞たうん82」の表紙にも
なった八幡浜市日土町の山間にある
築後88年



楽農ゼミナール2018

の生家を古民家「あらしやま山荘」としてリニューアル。志のあるものが集い農民芸術を楽しむ探求の場とし、ミュージシャンを招いて「楽農ゼミナール」を開催するとともに、自らも「報徳バンド」で歌っています。去年の「楽農ゼミナール2018」は「フォークソング人生論」

をテーマに、浪速のフォークシンガー鎌倉研さんの講演ライブで、老いも若きも涙と笑いの人生論を自らに投影させ自問しました。フォー



あらし山チロルの谷(八幡浜市日土町)

クソングの源流は、放浪し旅を重ねるなかで真実や市井の声を歌に託して伝える歴史であるといえます。ウディ・ガスリー、ピート・シーガー、ノーベル文学賞を受賞したボブ・デューランもそうです。歌には価値観を表現し伝えるという素晴らしい機能があります。農作業に日々を費やされていますが、天に近い所で暮らし、楽しみながら音楽を体感し学ぶ。ここに農民芸術が花開けば、お洒落な田舎になることは疑う余地ありません。さて、みかん山のバンジョー弾きとして腕を磨くのでしょうか。